町中心部を市民のオアシス（公楽園）に

（現状） 絆（きずな）市は典型的な地方中小都市の一つです。この田舎町の衰退、中でも中心部の空洞化は目に余ります。今やシャッター通りをとおりこし、至るところ空き地、あるいはガラガラの駐車場になって、こちら側から向こうの道が見えるほどです。こんな町が消滅可能都市として挙げられているのですね。

主因は、車社会になって、以前担っていた中心部の役割が不要になったからです。本当は、中心部には市民が必要とする役割があるのかもしれません。問題は、担うべき役割があるのかないのか、あるとすれば何か、それが分からないところにあります。

専門家の次の意見はヒントになりそうです。

【私たちが迎えつつある定常化の時代は、成長期にあった「市場化、産業化、金融化といった〝一つの大きなベクトル〟から解放され、一人ひとりが真の創造性を実現していく時代に他ならない。加えて、成長・拡大の時代には世界が一つの方向に向かう中で「時間」軸が優位となるが、定常期においては各地域の風土的多様性や固有の価値が再発見されていくだろう。そしてこれらは資本主義の変容ないしポスト資本主義というテーマにつながる。

理想と政策を含め、私たちはいま「創造的福祉社会」とも呼ぶべき社会像を構想していく時期に来ているのではないだろうか】（広井良典千葉大教授。朝日新聞2011.1.27）

30年後の「絆市」はどう変貌したか

まちづくりには、若者、よそ者、馬鹿者が不可欠、といわれますが、絆市にも一人の情熱家がいました。彼は振り返って述懐しています。「従来の発想ではだめだ。広井先生の見方で中心部のことを考えてみよう。今までにない新たな役割をつくり出すことだってあるじゃないか」と。そして考え付いたことは、

「市民の、市民による、市民のためのまちづくり」

この発想が欠けていたのではないか、ということでした。「まち中央部こそ市民の『共有空間』、旅人を含む市民の諸々のニーズを満たすスペースとして再構築したらどうか」と考えたのです。そして、青写真を描くに当たって、２，３の原則を用意しました。

一つは、**地域文化の視点**の必要性です。

「田舎育ちでもいったん都会に出た若者は、（自分の）田舎には帰りたくないという。それは職があるなしの問題以前に（たとえ職があったとしても）、心躍る面白さ、魅力ある対象がないからだ」とは、日々学生に接している平田オリザさんの指摘です。熱中できる地域文化がないから、ということですね。「田舎」に箱モノだけをつくって成功した話は聞きません。「仏作って魂入れず」つまり、地域文化こそ魂です。それなくして地方創生もないとい

うことですね。風土に根ざす地域文化の創造。そう、これからはその地を活かす“ローカル”の時代ってことですね。

二つは、**共生き思想の復権**です。

車社会がもたらした自由は、バラバラでもよかった時代の産物です。これからは本来の日本的な生き方、共生きの原則を取り入れる必要があります。

三つは、中心部に、市民の心のよりどころとなる**聖なる空間**の意味合いを込めること。

古代、集落の中心部には聖なる空間がありました。縄文早期の鹿児島県上野原遺跡では、中央広場で祭祀が行われ、人びとは心の平安を得ていたようです。海外の街の中央にある公園には銅像や凱旋門がまちの歴史やアイデンティティを感じさせ、それが彼らのよりどころとなっているようなのです。ところが日本の場合、中心部は所有者の恣意に任せた私的空間の寄せ集めにすぎず、公的機能はありません。

（市民協働のシナリオ）

そういった原則を取り入れ、中央市街地全体を市民の共有財産として意識し、地権者をはじめ関係者全員で、そのあり方を考えるようにしました。その結果、中心地の利用目的を、市民同士や旅人が交流し、刺激し合い、学びあい、歓び、愉しみ、癒されるため、と定め、そのために皆が協働することにしたのです。

まず、市民が「**共生きのまち宣言**」をし、その想いを共有しました。次に、協議体組織が創られ、計画と事業が進められました。「人が歓ぶためにはどうすればよいか、訪れる市民、旅人へのおもてなしに徹すれば「三方よし」、巡り巡って利益も喜びもついてくるはず」この市民意識の転換がありました。

● 「共生きまちの駅」構想

そうやって具体像が描かれます。最も空洞化が激しい 1 キロ四方程度の中心部全体を「共生きまちの駅」とします。ここで、「駅」とは、様々な動機で人びとが集う場、という意味です。人は癒しを、出会いを、面白情報を求めてやってくる。生活上の、起業のための、助言や支援を求めてやってくる。疲れた人には癒しを、孤独な人には出会いを与える、そんな共助、共生の場とします。

共生きまちの駅の経営者はまさに市民の意を体したメンバーです。彼らは、市民合意の下、市民や旅人のニーズを満たせる様々な制度設計を行って実行するわけです。

30 年後の中心市街地を想像してください。

幹線道路に囲まれたまちの駅には人家やランドマークが点在しています。小学校も公民館も記念館も、お寺も神社も昔のまま健在です。

空き地だった所には、ケヤキ、クス、ヤマボウシなどが点々と植わって木陰をつくり、小径が張り巡らされて所々ベンチが置かれ、三々五々人びとが休んでいます。また、中央付近

にはちょっとした丘があって、その花壇中央に、石碑が立ち、太文字の「**共生きのまち宣言**」と市民の決意が述べられています。来訪者はここに来て市民の想いを知るのです。

中央にある木造三階建ての建物が「共生きまちの駅」センター。旅人はまずここに立ち寄り、市に関する情報をすべて入手します。

広場には花卉市場が立ち、色とりどりの花でにぎわい、いくつかテントが張られ多くの人が出入りしています。鯉こく、イノシシ、シカなど自然の素材を使った料理が好評でしかも格安で食べられるのです。

センター隣の「共生きハウス」には、様々な悩み、職業や生活支援などの相談に訪れる市民が後を絶ちません。

周辺部のあちこちに子ども目線で作られた遊び場が。池には水草が生え、トンボが飛び交い、子どもたちが補虫網を振り回しています。喫茶店では地元画家の絵を鑑賞しながらコーヒーをいただけます。夕刻になれば呑兵ぇ横丁のおでん屋、スナック、焼鳥屋など、赤提灯に灯がともり、大人たちは「だれやみ」を楽しみにやってくるのです。

● 徹底したホスピタリティ

① 市民向けサービス

市民が「絆市で暮らしていける」ために、求職者の全員雇用を目標とし、世界のあらゆる成功事例を学んだ「共生きハウス」のスタッフたちが、起業、求人、求職の相談や仕事のシェアの斡旋を行っています。

一方で、若手芸術家に市民税を免除する奨励制度によって住み着いた多くのアーティストは優れた作品と多くのファンを生み、指導を受けたちびっ子芸術家も続々育っています。

少子化傾向は過去の問題となりました。子育てを終えた家庭主婦の一部は、地域主婦として子育てを支援する役割を担い、彼女らのノウハウが伝授され、若い母親は孤独と緊張から解放され、結婚、出産、育児が若者の現実となったのです。インドヒマラヤのラダックでの、子育てが年寄りの仕事となっている伝統を取り入れた手法です。これが年寄りの新たな存在価値を生み出し、彼女らには生き甲斐を与えました。

大学に進学できない若者向けに、元教師による私塾が開かれ、大学の教養過程程度の学力が得られています。経費の一部は、市の、まちづくり基金が当てられています。

② Ｉ、Ｊ、Ｕターン希望者向けサービス

町・地域情報の発信、帰郷の際の生活支援を行っています。中でも農地ボーナス制度は有効でした。村落で、高齢化や後継者不在が原因で耕作を放棄しようとする農業者は事前に役場に届け出ねばなりません。その土地情報を移住希望者に知らせ、後継者として育てる制度です。これは日本初の試みです。

③ 観光客、一般訪問者へのサービス

市域全体の観光地の愉しみ方巡り方の、いくつものコースを設けました。中でも癒しのツアーが好評です。参加者は、音楽鑑賞、森のセラピー、温泉浴、風景鑑賞、薬膳、座禅、といった一連の癒しと健康イベントを体験しながら二週間ほど滞在します。見事にリフレッシュされ、レピーターも海外客も増え続けています。これは絆市の豊かな自然や市民の文化資本が活かされた結果です。

● 徹底した地域主義

お菓子、料理、工芸品等、様々な新製品が誕生するのですが、これらのうち、発想が絆市オリジナルで地元素材を原則 6 割以上使えば地元特産として認定され、ふる里納税の返礼用としても公的にＰＲされます。また、新規建物には地元産の材木を用いるなど、地域資源の徹底活用を義務付けました。

エネルギーについても地産地消です。人工林の間伐材は廃棄することなく、ボイラー用ペレットとして再生され、地域暖房その他に使われ、お陰で、石油類への支出が激減し、その分お金が市内に留まることになっています。

次に、地元銀行とも協力して、市民・融資特別会計が創設されました。市民の預貯金を原資に、絆市での起業者等に低利で貸し出す仕組みです。さらには、地域通貨、ポイント制の活用で、製品やサービスが域内を循環する仕組みを作りました。こうした徹底した地域主義で、資本も域内で充実してきたのです。

安易に域外製品に頼らず、手間暇かけた本物志向の商品には、おもてなしの心、利他の心が宿っています。そういった取り組みが成功して次第にまちは豊かになり、郷土に帰る人、アイターンで住み着く人が増え続け、そして何よりも子どもたちの弾ける遊び声が聞こえるようになったのです。

「このまちなら安心して暮らしていける！」

すべての市民がそう確信しているのも、共生きの神様の下での一連の市民行動、これが本物だったから。これこそ求めるサプライズだったのですね。これがローカル時代の魁となり、全国から視察者が後を絶ちません。

むすび

以上が絆市の希望のシナリオです。明確な姿を現わすまでに20年30年はかかるでしょう。それでもよい。「市民の、市民による、市民のためのまちづくり」、この理念と基本原則を確実にしながら、まずは今ある資源を活用してぼちぼち始める内に、絆市オリジナルが育っていくことでしょう。

今求められるのは、意識の転換と持続する強いリーダーシップです。

「よきふる里を与えよ、さらばよき志、育たん」

住み続ける人、巣立つ人、帰り来る人・・・、郷土愛に満ちるすべての人びとが、懐かしい未来の創造者となりますように！　願いを込めてこの一文を捧げます。